

中島 敦

マリヤン



マリヤン

マリヤンというのは、私の良く知っている一人の島民
女の名前である。

マリヤンとはマリヤのことだ。聖母マリヤのマリヤで
ある。パラオ地方の島民はすべて発音が鼻にかかるので、
マリヤンと聞えるのだ。

マリヤンの年齢としが幾つだか、私は知らない。別に遠慮
した訳ではなかったが、つい聞いたことがないのである。
とにかくまだ三十には間があることだけは確かだ。

マリヤンの容貌が、島民の目から見ても美しいかどうか、これも私は知らない。醜いことだけはあるまいと思う。少しも日本がかつた所もなく、また西洋がかつた所もない（南洋でちよつと顔立が整っていると思われるのは大抵どちらかの血が混っている者だ。）純然たるミクロネシヤ・カナカの典型的な顔だが、私はそれを大變立派だと思ふ。人種としての制限は仕方が無いが、その制限の中で考えれば、実にノビノビと屈託の無い豊かな顔だと思ふ。しかし、マリヤンは自分のカナカ的な容貌を、多少恥ずかしいと考へているようである。というのは、後

に述べるように、彼女は極めてインテリであって、頭腦の内容はほとんどカナカではなくなっているからだ。それに、もう一つ、マリヤンの住んでいるコロールの町（南洋群島の文化の中心地だ。）では、島民等の間にあっても文明的な美の標準が巾はばを利かせているからである。実際、このコロールという街——そこに私が一番長く滞在していた訳だが——には、熱帯でありながら温帯の価値標準が巾をきかせている所から生ずる一種の混乱があるように思われた。最初この町に来た時はそれほど感じなかつたのだが、その後いったんここを去って、日本人

の一人も住まない島々を^{へめぐ}経巡って来たあとで再び訪れた時に、この事が極めてハッキリと感じられたのである。ここでは熱帯的のものも温帯的のものも共に美しく見えない。というより、全然、美というものが存在しないのだ。熱帯的な美をもつはずのものもここでは温帯文明的な去勢を受けて^{しな}萎びているし、温帯的な美をもつべきものも熱帯的風土自然（殊にその陽光の強さ）の下に不釣合な弱々しさを呈するに過ぎない。この町にあるものは、ただ、いかにも植民地の場末といった^{たいはい}頹廢した——それでいて妙に虚勢を張った所の目立つ貧しさばかりであ

る。とにかくマリヤンはこうした環境にいるために、自分の顔のカナカ的な豊かさを余り欣よろこんでいないように見えた。豊かといえは、しかし、容貌よりもむしろ、彼女の体格の方が一層豊かに違いない。身長は五尺五寸に近く、体重は少し痩せた時に二十貫といっていた位である。それも相当に緊しまった肥り方だから、全く羨うらやましい位見事な身体であった。

私が始めてマリヤンを見たのは、土俗学者H氏の部屋においてであった。夜、狭い独身官舎の一室で、畳の代りにうすべりを敷いた上に坐ってH氏と話をしている

と、窓の外で急にピピ―と口笛の音が聞え、窓を細目うちにあけた隙間から（H氏は南洋に十余年住んでいる中に暑さを感じなくなつてしまい、朝晩は寒くて窓をしめずにはいられないのである。）若い女の声が「はいつてもいい？」と聞いた。オヤ、この土俗学者先生も油断がならないなど驚いている中に、扉をあけてはいつて来たのが内地人ではなく、堂々たる体軀たいくの島民女だったので、もう一度私は驚いた。「僕のパラオ語の先生」とH氏は私に紹介した。H氏は今パラオ地方の古譚詩こたんしの類を集めて、それを邦訳しているのだが、その女は――マリヤンは日

を決めて一週に三日だけその手伝いをしに来るのだという。その晩も、私を側に置いて二人はすぐに勉強を始めた。パラオには文字というものが無い。古譚詩はすべてH氏が土地の故老に尋ねて歩いて、アルファベットを用いて筆記するのである。マリヤンは、まず筆記されたパラオ古譚詩のノートを見て、そこに書かれたパラオ語の間違いを直す。それから、訳しつつあるH氏の傍かたわらにいて、H氏の時々の質問に答えるのである。ほほう、英語が出来なのか、と私が感心すると、「そりや得意なもんだよ。内地の女学校にいたんだものねえ。」とH氏がマ

リヤンの方を見て笑いながら言った。マリヤンはちよつとてれたように厚い唇くちびるを綻ほころばせたが、別に打消しもしない。あとでH氏に聞くと、東京のどこかの女学校に何年か（卒業はしなかったらしいが）いたことがあるのだそうだ。「そうでなくても英語だけはおやじに教わっていたから出来るんですよ。」とH氏は附加えた。「おやじといつても養父ですがね。そら、あのウィリアム・ギボンの養女になっていたのですよ。」ギボンといわれなくても、私にはあり浩瀚こうかんなローマ衰亡史の著者しか思い当たらないのだが、よく聞くと、パラオでは相当に名の聞え

だインテリ混血児（英人と土民との）で、独逸領時代ドイツに民俗学者クレエマーが調査に来ていた間もずっと通訳として使われていた男だという。もっとも、独逸語ができただ訳ではなく、クレエマーとの間も英語で用を足していたのだそうだが、そういう男の養女であってみれば、英語が出来るのは当然である。

私の偏屈な気質のせいか、パラオの役所の同僚とはまるで打ち解けた交際ができず、私の友人と行っていいのはH氏の外に一人もいなかった。H氏の部屋に始終出入するにつれ、自然私はマリヤンとも親しくならざるを得

ない。マリヤンはH氏のことを「おじさん」と呼ぶ。彼女がまだほんの小さい時から知っているからだ。マリヤンは時々おじさんの所へうちからパラオ料理を作ってきてはご馳走する。その都度、私がおしやうばん相伴に預かるのである。ビンルンムと称するタピオカ芋のちまき粽や、テイテインムルという「甘い」菓子などを始めて覚えたのも、マリヤンのお蔭であつた。

ある時H氏と二人で道を通りがかりにちよつとマリヤンの家に寄つたことがある。うちはすべての他の島民家屋と同じく、丸竹を並べた床が大部分で、一部だけ板の

間になっている。遠慮なしに上って行くと、その板の間に小さなテーブルがあつて、本が載っていた。手に取つて見ると、一冊は厨川白村の英詩選釈で、もう一つは岩波文庫の「ロテイの結婚」であつた。天井に吊された棚には椰子やしバスケットがたくさん並び、室内に張られた紐ひもには簡単着の類が乱雑に掛けられ（島民は衣類をしまわないで全部だらしなく干し物のように引掛けて置く）、竹の床の下に鶏とり共の鳴声が聞える。室の隅には、マリヤンの親戚でもあろう、一人の女がしどけなく寐ねころんでいて、私共がはいつて行くとうさん臭そうな目をこちら

に向けたが、またそのまま向うへ寐返りを打ってしまった。そういう雰囲気の中で厨川白村やピエル・ロティを見付けたので、実際へんな気がした。少々いたましい気持がしたと言ってもいい位である。もつとも、その書物に對してはたましく感じたのか、マリヤンに對してはたましく感じたのか、そこまではハッキリ判らないのだが。その「ロティの結婚」については、マリヤンは不満の意を洩らしていた。現実の南洋は決してこんなものではないという不満である。「昔の、それもポリネシヤのことだから、良く分らないけれども、まさかこれほどのこと

はないでしょう。」と云う。コロールの町には岩波文庫を扱っている店が一軒も無い。ある時内地人の集まりの場所でたまたま私が山本有三氏の名を口にした所、すぐに、それはどういう人です？ と一斉いっせいに尋ねられた。私は別に万人が文学書を読まねばならぬと思っっている訳ではないが、とにかくこの町はこれほどに書物とは縁の遠い所である。恐らく、マリヤンは（内地人をも含めて）コロール第一の読書家かも知れない。

マリヤンには「五」四つになる女の児がある。夫は、今は無い。H氏に聞くと、マリヤンが追出したのだそう

である。それも、彼が度外れた嫉妬家であるとの理由で。こういうと、マリヤンはすこぶる気の荒い女のようにだが、——事実またどう考えても気の弱い方ではない——これには彼女の家柄から来る・島民としての地位の高さも考えねばならぬのだ。彼女の養父たる混血児のことは前にちよつと述べたが、パラオ人は母系制だから、これはマリヤンの家格に何の関係も無い。

だが、マリヤンの母というのが、コロールの第一長老家イディツ家の出なのだ。つまりマリヤンはコロール第一の名家に属するのである。マリヤンの夫だった男はパ

ラオ本島オギワルの者だったが、（パラオでは母系制ではあるが、結婚している間は妻が夫の家赶赴いて住む。夫が死ねば子供等をみんな引連れて実家に戻ってしまふけれども。）こころした家柄の関係もあり、またマリヤンが田舎住居いなかずまいを嫌うので、やや変則的ではあるが、夫の方がマリヤンの家に来て住んでいた。それをマリヤンが追出したのである。体格や腕力から云っても男の方が敵かなわなかつたのかも知れぬ。しかし、その後、追出された男がしばしばマリヤンの家に来て慰籍料ツガキーレンなどを持出しては復縁を嘆願するので、一度だけその願を容れてまた同棲

したのだそうだが、嫉妬男やきもちの本性は依然直らず、（とうよりも実際は、マリヤンと夫との頭脳の程度の相違が何よりの原因らしく）またまた別れたのだという。

そうして、それ以来独りでいる訳である。家格の関係で滅多な者を迎えることも出来ず（パラオでは特にこれがやかましい）、また、マリヤンが開化し過ぎているために大抵の島民では相手にならず、結局もうマリヤンは結婚できないのじゃないかな、とH氏は言っていた。そういえば、マリヤンの友達はどう「やら」も日本人ばかりのようだ。夕方などいつも内地人の商人の細君連の

縁台に割込んで話している。それもどうやら、大抵の場合マリヤンがその雑談の牛耳ぎゆうじを執とっているらしいのである。

私はマリヤンの盛装姿を見たことがある。純白の洋装にハイヒールをはき短い洋傘を手にしたいでたちである。彼女の顔色は例によって生き生きと（あるいはテラテラと）茶褐色に光り輝き、短い袖からは鬼をもひしきそうな太い腕がたくま逞たくましく出ており、円柱のごとき脚あしの下で靴の細い高い踵かかとが折れそうに見えた。貧弱な体軀をもった者の・体格的優越者への偏見を力つとめて排しようとする。

はしながらも、私は思わず噴出しそうになった。が、それと同時に、いつか彼女の部屋でロティを発見した時と同じような傷まじさを再び感じたことも事実である。但し、この場合もまた、そのいたまじさが、純白のドレスに対してやら、それを着けた当人に対してへてゝやら、ハッキリしなかつたのだが。

彼女の盛装姿を見てから二三日後のこと、私が宿舎の部屋で本を読んでいると、外で口笛の音が聞える。窓から覗くと、すぐ前のバナナ畠の下草をマリヤンが刈取っているのだ。島民女に時々課せられるこの町の勤労奉仕

に違いない。マリヤンの外にも七八人の島民女が鎌を手にして草の間にしゃがんでいる。口笛は別に私を呼んだのではないらし「く、」い。(マリヤンはH氏の部屋には行くが、私の部屋は知らないはずである。)マリヤンは私に見られていること「を」も知らずにセッセと刈っている。この間の盛装に比べて、今日はまた酷いなりをしている。色の褪あせた野良のら仕事用のアツパツパを着て、島民並に跣はだし足だ。口笛は、働きながら時々自分でも気が付かずに吹いているようである。傍の大籠に一杯刈り溜めると、かがめていた腰を伸ばしてこちらを向いた。私

を認めると、ニツと笑ったが、別に話しにも来ない。てれ隠しのようになり、わざと大きなかけ声を「ヨイショ」と掛けて、大籠を頭上に載せ、そのままさよならも言わずに向うへ行ってしまった。

去年の大晦日の晩、それは白々とした良い月夜だったが、H氏とマリヤンと私とは涼しい夜風に肌をさらしながら、街を歩いた。夜半までそうして時を過ごし、十二時になると同時に南洋神社に初詣でをしようというのである。私達はコロール波止場の方へ歩いて行った。波止場の先にプールが出来ているのだが、そのプールの縁に

我々は腰を下した。相当な年輩のくせにひどく歌の好きなH氏が、大声をあげて色んな歌を——主に氏の得意な様々のオペラの中の一節だったが——唱った。マリヤンは口笛ばかり吹いていた。厚い唇くちびるを丸くとんがらせて吹くのである。彼女のはそんなむずかしいオペラなんぞではなく、大抵フォスターの甘い曲ばかりである。聞きながら、ふと、私はそれらが元々北米の黒人共の哀かなしい歌だったことを思い出した。何の話のついでだったか、突然H氏がマリヤンに向っていやに大きな声で言った。

「マリヤン！　マリヤン！　（そういえばH氏は家を出

る前に合成酒を一杯引掛けて来たようだった。)マリヤンが今度お婿さんを貰うんだったら、内地の人でなきや駄目だなあ。え？　マリヤン！」

「フン」と厚い唇の端をちよつと歪めたきり、マリヤンは返事をしないで、プールの面を眺めていた。月はちよつと中天に近く、従って退潮ひきしおなので、海と通じているこのプールはほとんど底の石が現れそうなほど水がなくなっている。しばらくして、——私が先刻のH氏の続きを忘れてしまった頃——マリヤンが口を切った。

「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ。」

なんだ、こいつ、やっぱり先刻からずつと本気で自分の結婚のことを考えていたのかと、急に私は可笑しくな
って、大きな声で笑い出した。そうして、なおも笑いなが
ら、「やっぱり、内地の男は、どうなんだい？」と聞
いた。笑われたのに腹を立てたのか、マリヤンはそつぽ
を向いて返事をしなかった。

この春、H氏と私とが偶然にも揃って一時内地へ帰る
ことになった時、マリヤンは鶏をつぶして最後のパラオ
料理のご馳走をしてくれた。正月以来絶えて口にしなか

った肉の味に舌鼓したつづみを打ちながら、H氏と私とが、「いずれまた秋頃までには帰って来るよ」（本当に二人ともその予定だったの）と言うと、マリヤンが笑いながら言うのである。

「おじさんは、そりや半分以上島民なんだから、また戻って来るでしょうけれど、トンちゃん（困ったことに、マリヤンは私のことをこう呼ぶのだ。H氏の呼び方を真似たのである。初めは少し腹を立てたが、しまいには閉口して苦笑する外はなかった。）はねえ。」

「あてにならないと言うのかね」といえば、

「内地の人と幾ら友達になっても、一ぺん内地へ帰ったら二度と戻って来た人は無いんだものね」と珍しくしみじみと言った。

我々が内地へ帰ってから、H氏の所へ二三回マリヤンから便りがあつたそうである。その都度トンちゃんの消息を聞いて来ているという。

私はといえは、実は、横浜へ上陸するや否やたちまち寒さにやられて風邪かぜをひき、それがこじれて肋膜ろくまくになつてしまったのである。再びかの地の役所に戻ることは、

到底覺束無い。おぼつかない

H氏も最近偶然結婚（随分晩婚だが）の話がまとまり、東京に落ちつくこととなった。もちろん、南洋土俗研究に一生を捧げた氏のことだから、いずれはまた向うへも調査に出掛けることはあるだろうが、それにしても、マリヤンの予期していたように彼の地に永住することはなくなつた訳だ。

マリヤンが聞いたたら、何というだろうか？

（草稿より、別稿を収録）

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館